

調査の成果と課題話す

田辺・備崎経塚の講演会

発掘担当の中村教授

紀南文化財研究会と田辺市教委は8日、同市湊の市民総合センターで講演会を開いた。同市本宮町の備崎経塚群の発掘調査の成果について、発掘を担当した大阪大谷大学文学部文化財学科教授の中村浩さんが話した。

経塚は経典を地中に埋めて奉納した場所。

備崎経塚群の位置は熊野本宮大社旧社地、大斎原（おおよのはら）対岸にある。社殿を見渡す高台に位置することが、大社と関係の深い聖域であることを示すと説明。参拝者が熊野川を渡った地点でもあり、身を清める「禊（みそぎ）」の意味もあると話した。

周辺には合計7地点に、多くの経塚が分布している。そのうち、発掘したのは2地点だったが、発掘が破壊を伴ったため、考古学では必要最低限の調査を心掛けていると話した。十分な対策を考えず、発掘して失敗した例として、解体保存の必要に迫られた高松塚古墳を挙げ、遺跡を保存し伝えていくことも研究者の使命と強調した。

備崎経塚の発掘作業は、まず初めに経塚完成後に置かれた石を撤去して埋蔵当時の様子を再現し、石組みなどを記録したり、埋蔵地点を特定したりした。

経塚は多くが盗掘を受



△備崎経塚の発掘や研究について話す中村浩さん（田辺市湊の市民総合センターで）

けており、銅や陶器でできた経文を入れた筒のかけらなどが残っていたという。いずれも、本来埋めていた場所から出たのではなく、周辺に散乱していたことから、盗掘者が捨てたものという。

出土した鏡は国内産で、周縁部分が欠けていることから、経筒の底に使われた可能性があると言った。

陶器の破片を調査したところ、常滑焼など東海地方産の物や、中国の南宋の青白磁、中国南部で作られたとみられる三彩のものがあった。

庶民が使った焼き物の破片もあり、幅広い階級の人がこの経塚を造ったと指摘。この点が、ほかの地域の経塚と比べて、独特だと説明した。

今後の課題として造営者や、造営を仲介した人の研究、歴史的背景の研究などを挙げた。周辺の修験道など信仰とのかわりも重要という。

詳しい測量図と遺構分布図の作成、出土品のまとまった管理と展示公開場所が必要だと提案した。今後の調査のためには遺跡の保全も重要で、監視体制を整えたり、観光客が荒らしたりしないようにする必要があると訴えた。